

ヴァールブルクの言葉

『親愛なる神は細部に宿る』をめぐって

加藤 哲弘

「神は細部に宿る」という言葉を耳にする機会は比較的多い。しかし、それが誰の言葉であったのかを説明してくれる記述に出会うことは、めったにない。後述するように、この言葉は、ハンブルク生まれの美術史家ヴァールブルク (Aby Warburg, 1866–1929) が 1925 年に残した講義メモのなかに見出される。しかし、ヴァールブルクが、この言葉のほんとうの「作者」であるのかどうかについては、現状では確かなことが言えない⁽¹⁾。

したがって、この論文は、典拠の解明を主たる目的とするわけではない。以下で試みられるのは、むしろ、この有名な言葉と、その暫定的な「作者」であるヴァールブルクとの関係、とくに彼がじっさいの作品解釈のなかで洗練させていった美術史ないしは「文化学」上の方法論との関係について明らかにすることである。

以下では、まず、この言葉の典拠についての諸説を概観したのちに、ヴァールブルク自身の作品解釈活動のなかで「細部」がどのような意味をもっていたのかを追跡する。次いで、ヴァールブルクによるこの言葉の使用の背後にある、「細部」をめぐるとの伝統的なコンテキストについて考察することで、彼が「細部」を重視した理由を明らかにするとともに、最後に、日本でのこの言葉の受容についてかんたんな紹介を付け加える。

1 典拠について

先述したように、この言葉の用例で、現在確実に確認できる最古のものは、1925年にヴァールブルクが残した講義メモである（図版参照）²⁾。それによれば、ヴァールブルクは、11月25日に開講されたこの講義で、2つの標語を掲げた。その第一は、「わたしたちは、自らの無知を探り出し、見つければすぐにそれを打破しなければならない Wir suchen unsere Ignoranz auf und schlagen die, wo wir sie finden」であり、その第二が、「親愛なる神は細部に宿る Der liebe Gott steckt im Detail」である。この講義の題目は「イタリア初期ルネサンス美術における様式変遷に対して古代文化がもつ意義」であったが、この講義のなかで取り上げられるのは、セメスターの最初から最後までに、たった1点の画像（15世紀中ごろに、おそらくフィレンツェで制作された彩色カッソーネ〔婚礼長持〕の前面絵画）³⁾だけとされていた。対象を限定することで、「精細な作業を通して大枠の方向を定め Große Linie durch Kleinarbeit」、「個々の詳細な部分への配慮 Respekt vor der Einzelheit」を忘れない「祖先の遺風に従う釈義 Exegese more majorum」を実践するのだとヴァールブルクは記している。

「神は細部に宿る」というこの言葉そのものについては、古代ヘブライ世界に由来するものであるとか、あるいは、中世哲学のなかではすでに有名であったとする説が唱えられることがある。しかし、そのいずれについても、確実な根拠が示されたことはない。

また、*Bartlett's Familiar Quotations* では、「“ God is in the details ” とは、建築家ミース・ファン・デル・ローエ [Ludwig Mies van der Rohe, 1886–1969] と美術史家ヴァールブルクに結びつけられる格言」とされている。しかし、この辞典によれば、この引用句の「起源は不詳」で、「その作者がフローベール [Gustave Flauvert, 1821–1880] に帰されることもあるが (Le bon Dieu est dans le detail), そのことが検証されているわけではない」⁴⁾。

フローベールに由来するとの説は、ゴンブリッチによるヴァールブルクについての有名な伝記のなかで紹介されている⁽⁵⁾。ただし、ゴンブリッチ自身は、それがどの箇所にあるのかを、けっきょく提示することができなかった⁽⁶⁾。後述するように、先行する精神伝統のなかにも、たしかに類似の表現が多く見出される。しかし、少なくとも現在の時点では、ヴトケも主張しているように、この言葉の持つ意味合いを、このような洗練された文体で刻印したのがヴァールブルクなのだ⁽⁷⁾と結論するのが妥当なところであろう⁽⁷⁾。

ちなみに、ミースとの関係について言えば、有名な“Less is More”もそうだが、この言葉は、近代主義的な禁欲精神を示していて興味深い。アメリカの建築家たちやデザイン業界で多用されているのも、うなずける。しかし、時間的な前後関係からみて、プライオリティはヴァールブルクのほうにあると見るのが自然である。

では、ヴァールブルクにとって、この「細部」とはいったい何であり、どのような意味を持つものであったのか？ そして、なぜ彼は「細部」を重視しようとしたのか？ 次の章では、この疑問に答えることを試みる。

2 ヴァールブルクと「細部」

(1) 画面内の描写の「細部」

ヴァールブルクが「細部」にこだわることを標榜するのは、じつは、1925年の講義が最初というわけではない。画面内の描写の細部ということに意味を限定してみても、有名な学位請求論文『サンドロ・ボッティチェッリの《ウェヌスの誕生》と《春》』(1891)のなかで、すでに彼は「揺れ動く付帯物」(風の戯れによって翻る白い衣服や、ほつれてなびく髪の毛など)に注目して、ボッティチェッリの絵画表現がポリツィアーノによる詩の写実的な細部表現にもとづいていることを論証している⁽⁸⁾。

このほかに、ヴァールブルクは、たとえば、1902年の『肖像芸術とフィレンツェの市民階級』では、フィレンツェのサンタ・クロッチェ聖堂バルディ礼

拝堂（ジョット作）とサンタ・トリニタ聖堂サッセッティ礼拝堂（ギルランダーイオ作）における聖フランチェスコ伝の物語描写を比較して、後者においては、「注文者たちが、生身の似姿のまま、見物人として、あるいは、伝説に登場する人物にさえなって、聖人の物語のなかに自由に入りこんでいる⁽⁹⁾」ことを明らかにしている。この論証に際して、叙述のハイライトとなったのは、注文主のフランチェスコ・サッセッティ、ロレンツォとジュリアーノをはじめとするメディチ家の人物、ジュリアーノの教師役のポリツィアーノ、さらにはマッテオ・フランコやルイーゲ・プルチといった当時の有名人物を、鼻の形といった微細な相貌表現の類似性を比較しながら身元確認を進めていく記述である。

また、やはり1902年に発表された『フランドル美術とフィレンツェの初期ルネサンス』でも、ヴァールブルクは、数奇な運命のいたずらによってポーランドのグダンスクの聖母マリア教会に落ち着いた（現在は国立美術館所蔵）、ハンス・メムリンク作の三連祭壇画《最後の審判》の外側パネルの寄進者像や中央パネル中央の天秤のなかにいる人物の相貌表現、さらには画面に描かれている紋章などを取り上げて、当初の寄進者であるアンジェロ・ターニヤ、その後ターニの地位を奪ったトンマーゾ・ポルティナーリとこの祭壇画との関係を考察した⁽¹⁰⁾。あるいは、1907年の『ブルゴーニュのタピスリーに見られる働く農民』では、森で働ききりたちを描いた、縦320cm、横510cmのタピスリーのなかに描きこまれている猿、鹿、ノロジカ、雉、兎、ライオン、狼、豹といった動物たちをひとつひとつ探し出したのちに、画面左手前にいる大きな獵犬の首輪に織り込まれた「3本の鍵の形をした紋章」（ブルゴーニュの有名なロラン家の紋章）を発見している⁽¹¹⁾。

（2）過去の歴史世界の「細部」

しかし、ヴァールブルクにとって、細部とは、気がつきにくい微細な画像情報のことにはとどまらない。彼にとって重要なのは、視覚という感覚によって発見される画面内の事実だけではなく、むしろ古文書の解読といった、言語に

よって発見される過去の事実関係のほうだと言ってもよい。そのことを示す彼のテキストを、ヴトケの指摘にもとづいて、いくつか以下に紹介する。

たとえば、1901年10月28日にハンブルクで行われた講演の結びでヴァールブルクは、「歴史学本来のもの見方とは、感覚の鋭さを誇らしげに見せびらかすこととは少し違った」、「過去に対する敬虔さにもとづくもの」であり、「細部に立ち入ることは、その意味で、視点の全体を広げることを妨げないばかりか、その不可欠の前提となる」ことを強調した⁽¹²⁾。ここに表れているのは、芸術作品の美や崇高を享受することよりも、むしろ過去の事実を忠実に復元することを優先する文献学的な歴史学者の姿勢である。

また、ルネサンス期フィレンツェの銀行家が残した「遺言」の文章をたんねんに分析した1907年の論文『フランチェスコ・サッセッティの終意処分』の結論部分でヴァールブルクは、次のように述べている。

「人間性という点にかんして汲めども尽きない豊かさを示すフィレンツェの古文書資料にもとづけば、そこからは当時の時代背景を十分に復元できるので、美的享受の方向に偏った芸術考察を歴史学的に規制することができるようになる」⁽¹³⁾

また、1912年にローマで行われた有名な講演『フェッラーラのスキファノイア宮におけるイタリア美術と国際的占星術』の準備段階を示す1911年3月11日のメモ「フェッラーラのスキファノイア宮の月歴描写における古代宇宙論について」で、ヴァールブルクは次のように述べる。

「まず何よりも必要なのは、われわれの時代の芸術学研究のなかで流行している精神的態度とは逆に、むしろ写本の鑑定作業で行われているようなすでに長きにわたって試練に耐えてきた文献史学の方法をこの画像に適用することである。この方法は、たとえばパリンプセストのようなものを扱うときの手法であって、これによって、まぎれもなく古代に描かれた写本

を、中世に上書きされた錯綜した層のなかから復元することが可能になる」⁽¹⁴⁾

これらの文章からもわかるように、ヴァールブルクが考えている「細部」とは、たんなる画面内の「部分」のことではない。それは、「美学」が扱う視覚的な細部というよりは、むしろ「歴史学」が「文献学」という補助科学の助けを借りて復元する過去の世界を織りなす事実関係の「細部」なのである。このことは、「祖先の遺風に従う釈義」という言葉からも窺えるように、1925年の講義メモでも変わらない。

(3)「細部」にこだわる理由

ヴァールブルク自身の発言をそのまま引用したことで、彼がなぜ細部にこれほどまでにこだわっていたのかが少し明確になってきた。

ヴァールブルクの美術史学、あるいは彼自身の呼び方に従えば「文化学」の基本理念は、過去の歴史世界を文献学的手法によって再構成することにある。前節の最初に引用した1901年の講演のなかで彼は次のようにも述べている。

「わたしにとって重要なのは、美術史研究の広範な読者たちがきちんと注意して、細部にのみ拘泥する退屈な様式鑑定の方向に走らないようにすると同時に、さらにそれ以上に、敬虔さを欠いたディレッタンティズムに陥って自己満足的なおしゃべりを繰り広げることからは身を守るようになることだけである。過去そのものが、自らの声で再び自らのことを語りはじめることができるようになれば、わたしたちはついに芸術を扱う文化史学を手に入れることになるだろう」⁽¹⁵⁾

新たに創設されたハンブルク大学に教授として赴任した哲学者カッシーラを「なぜハンブルクが失ってはならないのか」を訴えた新聞記事のなかでヴァー

ルブルクは、哲学部の学生や教師たちは「利害にとらわれずに真実を追究せよという定言命法」に従うのだということを強調した⁽¹⁶⁾。ヴァールブルクによれば、美術史学の研究とは、このような真摯な実証主義的な精神にもとづいて、過去の歴史的世界が語る肉声を復元することなのである。

ヴァールブルクがこのように実証史学の精神を強調する背後には、当時流行していた美的な芸術研究に対する強い反感があった。彼が「美的享受の方向に偏った芸術考察」や「(事実にたいする)敬虔さを欠いたディレッタンティズム」に反発したのは、ラファエル前派に代表されるような、ルネサンス時代の巨匠たちへの礼賛を繰り返す当時の美術史学の主流に対する対抗意識からである⁽¹⁷⁾。ポッティチェリについての学位請求論文を提出したのちに、弟の結婚式出席のためにアメリカに渡り、南西部の先住民居住地を訪れたときの彼のメモには、次のような記述がある。

「わたしは、美的なものばかりを重視する美術史学に対して心底むかつきを覚えていた。絵をただ形の面からしかながめず、宗教と芸術の中間的な産物としての絵がもつ生物学的な必然性には目もくれないやり方は、わたしには、不毛な言葉の押し売りのようにしか見えなかったのだ。」⁽¹⁸⁾

このように、ヴァールブルクにおける「細部」への愛は、繊細な感覚の快楽を享受することではけっしてない。彼にとって「細部」は、むしろ禁欲的な文献資料調査と画像解読の作業のなかで「真実」への道を知らせるある種の通路ないしは「リンク」として存在していた。このような解釈観が、19世紀の実証史学のコンテキストを越えて、たとえばタルムード解釈のような「祖先の遺風に従う釈義」の伝統のなかにまで遡って見出せるものかどうかについては、残念ながら、まだ結論を下せる段階ではない⁽¹⁹⁾。しかし、次章では、そのことを念頭に置いて、ヴァールブルクを取り囲む前後の歴史的な、あるいは同時代のコンテキストのなかに、この言葉の意味連関を求めてみる。

3 「細部」をめぐる精神的伝統

(1) ヴァールブルク以前

ミシェル・フーコーは『言葉と物』のなかで、次のように述べている。

「いずれにせよ、《細部》こそは、すでに [古典主義時代よりも] ずっと以前から、神学ならびに禁欲主義に含まれる一つの範疇^{カテゴリー}であったのである。すなわち、あらゆる細部が重要なのである。というのは、神の視点では、どんな無限の広がりといえども一つの細部より大きいわけではないからであり、しかも神の個々の意思の一つが望まなかったくらいに小さいものは何一つして存在しないからである。細部の卓越性を重視するこうした大きな伝統に、やがて難なくつけ加わるようになるのがキリスト教教育に、学校ないしは軍隊での教育方法に、最後にすべての訓育^{ドレッシング}形式に含まれる細部重視策である。真の信仰者にそうであるように、規律・訓練^{ディシプリネ}を加えられる人間には、どんな細部もが無関係ではない。」⁽²⁰⁾

実証科学的な精神の基礎となるこのような考え方は、このようにフーコーによれば、すでに早くからキリスト教教育や、学校ないしは軍隊における教育のなかに取り込まれてきた。フーコーは言及していないが、「解放」が進行するなかでドイツ国民として誇らしげに兵役についたユダヤ人であるヴァールブルク⁽²¹⁾が、細部の卓越性を重視するこの大きな精神的伝統の内部にいたことは、言うまでもないだろう。

また、先述したように、このヴァールブルクの本 motto のフロアール典拠説を慎重に却下したヴトケは、もう少し具体的に、ヴァールブルクが意識的に、あるいは無意識のうちに依拠したかもしれない三つの出典可能性の圏域を指摘する⁽²²⁾。具体的には、まず、神話学者のヘルマン・ウーゼナー (Hermann Usener, 1834–1905)、第二に、テオドーア・フォンターネ (Theodor Fon-

tane, 1819–98) に代表されるドイツ 19 世紀の写実主義の小説家たち, 第三に, 哲学者のスピノザ (Baruch de Spinoza, 1632–77) がそうである。

ヴトケによれば, この三者はすべてヴァールブルクが愛読した著者たちである⁽²³⁾。ボン大学在学中にヴァールブルクが熱心にその講義を受講したウーゼナーは, 「細部に対する文献学上の洞察」をとくに重視した古典文献学者であった。また, フォンターネには「あらゆる利害関係は細部に宿る」とか「魔力はいつも細部に潜んでいる」といった言葉が残っている。さらに, スピノザは, ヴァールブルクがストラスブル時代に研究テーマにとりあげたユダヤ系の哲学者であり, 『エティカ』には, 「われわれは, 個物をより多く認識するにつれて, より多く神を認識する」(第 5 部第 24 命題) という一節もある。

以上のように, 「神は細部に宿る」というヴァールブルクの標語が持つ意味内容が, 先行伝統のコンテクストのなかではぐくまれたものであることについては間違いない。ヴァールブルクは, この伝統的な精神を受けつぎながら, 巧みに洗練された文体でそれを刻印したのである。

(2) 同時代のコンテクスト

一方, ヴァールブルクと同時代のコンテクストのなかでも, 「見落とされがちな些細な事実のなかに真理へと通じる重要なヒントが隠されている」というこの考えは, さまざまなところに見い出される。なかでも, 最も重要なのは, ギンズブルクをはじめとしてすでに多くの論者たちの指摘があるように, 美術鑑定家モレツリ (Giovanni Morelli, 1816–1891), 推理小説家 Doyle (Sir Arthur Conan Doyle, 1859–1930), 精神分析医フロイト (Sigmund Freud, 1856–1939) の三者の間に共通性が見出されるという点であろう⁽²⁴⁾。

耳たぶや指の爪といった, ふつつなら誰も目を留めない人体の局所の描写を比較することで, その作者の判別を行おうとしたモレツリ, 事件の微細な痕跡を虫眼鏡で探し出し, 瑣末な事実を積み重ねることで犯罪捜査の基礎を説く探偵ホームズを描き出した Doyle, そして, 些細な言いまちがいのなかに, 意識されない心の深層の徴候を読み取るフロイト。この 3 人のいずれもが, 些細

なものへのこだわりと愛をヴァールブルクと共有しており、いずれもが、「神は細部に宿る」という標語を掲げる資格を持っている。もちろん、これらの論者とヴァールブルクとのあいだの差異も無視できない。しかし、その点についての考察は、稿を改める必要がある。

(3) ヴァールブルク以後

さて、ヴァールブルクのあとに続く世代には、この言葉はどのように受け継がれていったのだろうか。

この言葉がのちに有名になる最初のきっかけを作ったのはカッシーラである。彼は、ヴァールブルクが急逝したあとの埋葬に際しての式辞で、次のように述べた。

「『親愛なる神は細部に宿る』ということばを案出したのはヴァールブルクその人でした。些細なものに対する敬虔な気持ちや、一見これ以上取るに足りないものはないと思えるようなものに寄せる愛情という点で、彼に及ぶものはありませんでした。」⁽²⁵⁾

しかし、細部に宿る神について言及したヴァールブルクのこの言葉が世間に知れ渡っていくうえで決定的な役割を果たしたのは、クルツィウスの著書『ヨーロッパ文学とラテン中世』である。ここでクルツィウスは、ヴァールブルクのコトワールを2度にわたって引用している。この書は、のちに人文学研究者たちのあいだで広く読まれることになった。その結果、グトケも指摘しているように、その読者たちを通して、ヴァールブルクのコトワールは広く知られるところとなり、格言として定着していったのである⁽²⁶⁾。

4 むすび：日本での受容

日本でもこの言葉は、よく使われている。とくに目立つのは、建築やデザイ

ン関係業界での状況であろうか。この語は、さらに、「良質は細部に宿る」といった読み替えをされて産業界一般にも広がっている。先述したように、このことは、アメリカでのミースの活動がもたらしたものだと推測される。また、ここから派生したものであろうか、映画、アニメ、ゲーム、コンピュータ・プログラムなどの領域における最近の使用例も見逃せない。

一方、ヨーロッパの人文科学研究者たちからの直接影響は、林達夫や久野収経由で、法律学や政治学、社会学、地域文化論などにも現れている⁽²⁷⁾。ここでは、「少数派」や、中央に対する「地方」の存在意義、その尊重の理由づけなどにこの言葉が用いられる場合が多い。

このほかに、神学者や自然科学者が、摂理の普遍性を感動的に表現する場合もある。ミクロコスモス（細部）とマクロコスモス（神）との照応関係をこの語は示すわけである。このケースも含めて言えることだが、この言葉が、とくに最近になって頻繁に流通しはじめたこと背景には、いわゆる「大きな物語の喪失」の時代になって（「木」ばかりで）「森」が見えにくくなってきたことが関係しているのかもしれない。

ちなみに、ドイツ語では、神とならんで悪魔もよく登場する。「悪魔が細部に宿る」ことの意味は、細部をおろそかにすることの危険性を警告するという点で、じつは、神という語を使うのとそれほど意味に変わりはない⁽²⁸⁾。しかし、これを別の読み方で解釈する可能性もないわけではない。たとえば、細部に宿るこの「悪魔」が、視覚的な快楽や、瑣末なものに拘泥することや特殊事例の性急な一般化への自己弁護、自己完結的な資料調査がもたらす満足感などへの誘惑者だとするとどうだろうか？ ヴァールブルクは、細部に宿るこの悪魔については言及していない。しかし、彼の主張は、この対照的な変異体との比較によって、意外にも明確になるように思われる。

注

- (1) 以下は、この言葉をめぐる事実関係を、現在の時点で確認できるかぎりでは追跡調査した結果である。もし、記述に誤りがあったり、あるいは追加の情報があったりする場合は、katotk@kwansei.ac.jp まで、お知らせいただければ幸いである。

- (2) Wuttke 1992, S. 619.
- (3) ここには、フィレンツェのサンタ・クローチェ広場で催された「ジョストラ」(馬上槍試合)の光景が描かれている。また、このカッソーネは、この時期、アメリカ、ニューヘヴンのイエール大学ジャーヴィス・コレクションに所蔵されていた。
- (4) Bartlett 1992, p. 783.
- (5) Gombrich 1980, p. 13 f.
- (6) Cf. Wuttke 1992, S. 623 f.
- (7) Wuttke 1992, S. 624.
- (8) Warburg 1998, S. 1-60 .(『ヴァールブルク著作集』1.)
- (9) Warburg 1998, S. 89-126.
- (10) Warburg 1998, S. 185-206.
- (11) Warburg 1998, S. 221-230.
- (12) Wuttke 1992, S. 615.
- (13) Wuttke 1992, S. 616.
- (14) Wuttke 1992, S. 616.
- (15) Wuttke 1992, S. 614.
- (16) Wuttke 1992, S. 621.
- (17) 加藤 1997, p. 37 f. 参照。
- (18) Gombrich 1980, p. 88 f.
- (19) Cf. Syamken 1980 ; 加藤 2000, p. 24.
- (20) Foucault 1974, p. 145.
- (21) 加藤 2000, p. 16, 18, 25, 27 参照。
- (22) Wuttke 1992, S. 623 f.
- (23) Wuttke 1992, S. 624.
- (24) Cf. Ginzburg 1988.
- (25) Wuttke 1992, S. 621.
- (26) Wuttke 1992, S. 624 f.
- (27) 久野 1977 などを参照。
- (28) Cf. Newsweek, January 17, 1994, p. 12.

引用文献

Bartlett (1992) : *Bartlett's familiar quotations : a collection of passages, phrases, and proverbs traced to their sources in ancient and modern literature*. 16th ed. Boston : Little, Brown, 1992.

Foucault, M . (1974) : *Les mots et les choses : une archeologie des sciences hu-*

- maines*. Paris: Gallimard, 1966. (フーコー, 言葉と物: 人文科学の考古学. 渡辺一民, 佐々木明訳. 東京: 新潮社, 1974)
- Ginzburg, C. (1988): Morelli, Freud, and Sherlock Holmes: Clues and Scientific Method. *The Sign of Three: Dupin, Holmes, Peirce*. Eds. U. Eco and Th. A. Sebeok. Bloomington: Indiana UP, 1988. pp. 81-118.
- Gombrich, E. H. (1980): *Aby Warburg. An intellectual biography. With a memoir on the history of the library by F. Saxl*. Oxford; Chicago: Phaidon, 1980 (1970). (ゴンブリッチ, アビ・ヴァールブルク伝: ある知的生涯. 鈴木杜幾子訳. 東京, 晶文社, 1986)
- 加藤哲弘 (1997): 近代の外の芸術へ: アービ・ヴァールブルクと比較美術研究. 美学 188, 1997, pp. 36-45.
- 加藤哲弘 (2000): ヴァールブルクとベレンソン: テキストとコンテキストのユダヤ的性格. 西洋美術研究 4, 2000, pp. 12-29.
- 久野 収 (1977): 神は細部に宿りたまう. 東京: 三一書房, 1977.
- Syamken, G. (1980): Warburgs Umwege als Hermeneutik more majorum. *Jahrbuch der Hamburger Kunstsammlungen* 25, 1980, pp. 15-26.
- Warburg, A. (1998): *Gesammelte Schriften: Studienausgabe*, hrsg. v. H. Bredekamp, M. Diers, K. W. Forster, N. Mann, S. Settis und M. Warnke. I. Abteilung, Bd. I. 1, 2: Die Erneuerung der heidnischen Antike: Kulturwissenschaftliche Beiträge zur Geschichte der europäischen Renaissance, Reprint der von G. Bing unter Mitarbeit von F. Rougemont editierten Ausgabe von 1932, neu hrsg. v. H. Bredekamp und M. Diers, Berlin: Akademie Verlag, 1998. (ヴァールブルク著作集 1. サンドロ・ボッティチェッリの《ウエヌスの誕生》と《春》: イタリア初期ルネサンスにおける古代表象に関する研究 [伊藤博明監訳]; 7. 蛇儀礼: 北アメリカ, プエブロ・インディアン居住地域からのイメージ [加藤哲弘訳]. 東京: ありな書房, 2003)
- Wuttke, D. (1992): *Aby M. Warburg: Ausgewählte Schriften und Würdigungen*. Herausgegeben von D. Wuttke in Verbindung mit C. G. Heise. Zweite, verbesserte und bibliographisch ergänzte Auflage. Baden-Baden: Verlag Valentin Koerner, 1980. 3. Aufl, 1992.